

日本経済・宴のあと

栄光の産業社会はどこへ行くのか

Naohiro AMAYA

天谷直弘



日本経済・宴のあと

栄光の産業社会はどこへ行くのか

Naochiro AMAYA

天谷直弘

112
D2
965



S2A196/03

FB

1985.5.8

〈著者略歴〉

天谷 直弘 (あまや なおひろ)

大正14年福井県に生まれる。昭和23年東京大学法学部政治学科卒業。同年商工省入省。その後、通産省審議官、基礎産業局長等を歴任し、昭和53年資源エネルギー庁長官。通産省顧問をへて、現在、(財)産業研究所顧問。主な著書に、『日本株式会社・残された選択』(PHP研究所)がある。

日本経済・宴のあと

栄光の産業社会はどこへ行くのか

一九八四年十二月二十四日 第一版第一刷

著者 天谷直弘

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町十一

電話 (〇七五) 六八一―四四三一

東京事務所(〇三)二九五―九二一一

印刷所 図書印刷株式会社
製本所

落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたしません。

© Naohiro Amaya 1984 Printed in Japan

ISBN 4-569-21437-1

はしがき

昭和二三年から五六年に至る三三年間、私は通商産業省に勤務した。商工省五〇周年、通商産業省二五周年に当る昭和五〇年、私は『漂流する日本経済』という論文集を毎日新聞社から出版した。同書は絶版になっていたが、今回PHP研究所のすすめにより、同書の内容にかなりの加除を行い、本書のような形で再度世に問うこととした。

執筆当時からすでに十年前後の歳月が経過しているため、本書のなかには時世にそぐわなくなつた記述も多少は見られるが、他面、十年前に抱いた問題意識のうちには、今日にそのままあてはまるものも少くないと思う。

私は一九七一年を境に、「バックス・アメリカーナ」が崩壊過程に入り、世界経済と日本経済の「漂流」が始まったと考えている。『漂流する日本経済』という書名はそのような認識を反映していた。今日、はるかな水平線上に鳥影が見えてきたような気もするが、雲か山か必ずしも定かではない。このようなとき、行く末を尋ねるために越し方をもう一度振り返ってみることは有益であろう。本書は七〇年代というひとつの時代の思いや悩みを色濃く止めているので、過ぎし時代をしのぶとともに未来を考えるにあたっての、なんらかの手がかりになるものとひそかに考えている。御一読を賜われれば幸いである。

一九八四年秋

著者

日本経済・宴のあと

日本経済・宴のあと

* 目次

第一部 日本型産業社会

GNP 神話の崩壊 11

産業の真の役割とは？

産業界は栄光の頂点をこえた

崩壊したイエ・ムラ・クニ

キャタピラ型社会構造が日本経済を発展させた

重化学工業化の宴のあとにくるものは

明治百年が残したひずみ

苦悶する日本株式会社 31

変化の時代が政治になげかけるものは何か

鎖国はまだ終わっていない

建設的対話が現代の悪気流をとめる

福祉社会への門は成熟した知恵をもつ人のみに開かれている

福祉供給構造の歪みは是正できる

供給のフロンティアは無限か？

宇宙船地球号の宿命は？

文明の崩壊をもたらすもの

社会的責任の新次元 58

内なる故郷の荒廃

公害と情報公害と

大企業体制下の分配の公正

社会的制御は可能か

衰える企業、伸びる企業

第二部 日本 of 産業政策

産業政策のめざすもの 77

破壊からはじまった建設

戦後勃興期の産業政策

重化学工業化にばく進する

日本株式会社とは

貿易・資本自由化の波が襲う

新時代を迎えた通産政策

時代の暗転と知識集約化

システム化を要請する産業政策

知識集約化の文明史観 116

外延的拡大は行詰っている

内面的充実の追求へ

人間欲求の階層構造を探る

日本は知識集約化の先兵

バベルの塔に挑む

第三部 日本的企業風土と独禁法

日本の競争社会の特質 141

日本の企業社会はゲマインシャフト的性格が強い

過当競争と日本の銀行行動

カルテル体質は定着したか

安定路線への模索

日本社会に根ざす競争政策を

第四部 国際化時代の日本の戦略

漂流する世界と日本経済の進路 173

動揺するパックス・アメリカーナ

加重された経済政策の誤り

キメ手欠く世界の対応

日本経済の生きる道

石油危機と国家百年の大計 199

ベアリングの政治力学

中間諸国家による合従の策

第一部 日本型産業社会

GNP 神話の崩壊

産業の真の役割とは？

その昔、管仲は「倉廩^シ実ツレバ則チ礼節ヲ知り、衣食足りテ榮辱ヲ知ル」といった。それから、二六〇〇余年たった今日でも、この言葉は厳然たる真理である。サハラ砂漠の南ではいま、数百万の人間が飢えのため死に瀕しており、インド亜大陸、セイロン、ニューギニアにも、やせおとろえた空腹の民が充満しているという。

ひとごとではない。私は終戦前後の日本の飢餓地獄を一生忘れられない。また、昭和の初年には、東北の貧農は女兒を金にかえて口を糊したというが、これも私の同時代の出来事である。子供の頃、私は曾祖母から天明の大飢饉の話を書いた。草根木皮をかじったあと、ついに飢民は死者の肉をむさぼったというが、これとて一九〇年前の出来事にすぎない。

このような窮境を経験した場合、人間はおおむね二種類の反応を示す。第一は現実主義的対応であり、第二は精神主義的対応である。「人はパンのみにて生きるに非ず」という有名な言葉があるが、これは多分、飢えと虐政に苦しみ喘いでいたイスラエルの民に向かって発せられた救世主のなぐさめの言葉であつたらう。日本では、徳川時代の困窮した武士は「武士は食わねど高揚子」という言葉で飢えをがまんしようとした。このような精神主義的対応は人間のすぐれた能力を示すものではあるが、しかし、大多数の人間にとっては、なんとしても、ひもじさには食物、寒さには着物が必要である。したがって、人間は大昔からいかにして飢えと寒さをしのぐために必要な「モノ」を獲得することができるか、という切実な課題の解決のために知恵をしぼってきた。

自由とは、第一次的概念として、飢えと寒さその他自然の暴力の支配からの人間の独立を意味している。万人が自然の支配に屈服している世界は動物的世界である。原始共産社会がもしあつたとすれば、それは理想的社会ではなくて、動物的世界であつたであらう。

さて、人間が自然の支配から独立しようとする場合、種々の手段を用いる。たとえば、人間とは道具をつくり、道具を使う動物である、といわれるが、道具は人間にとって自然の支配に抵抗する場合の有力な手段である。しかし、道具を動かすにはエネルギーがいる。そこで牛馬の力が大いに利用されたが、動力と同時に知的能力を兼ね備えているのは人間のみである。そこで、人間が自然の暴力から自由であるためには「モノ」が必要であり、「モノ」を獲得するためには生産手段（道具）が必要であり、生産手段を動かすためには労働力が必要であるという関係が生じてきた。

生産手段と労働力が結合されて、社会的生産が行われる場合、その活動を産業という。従来、産業は従属的地位にある人間の従属的活動（労働）に依存する形をとるのが通常であった。各時代の技術や文明の発展段階に応じて産業の効率性を考えると、このような産業のあり方を一がいに否定すべきではあるまい。

しかし、人間の自由の欲求に淵源している産業活動が、人間による人間の支配を支柱として存立していることが矛盾であることも疑問の余地がない。そこで、産業がある程度発展し、人間が飢寒の脅威に対して相対的に余裕をもちうる状態に達すると、必ず被支配者の自由を求める闘争がおこる。奴隷が、農奴が、第三階級が、一揆や革命をおこした。

産業は手段であって、真の目的は人間の自由の拡大深化にあるとすれば、これは当然の動きである。現代においても、産業の発展、GNPの成長が課題ではなくて、GNPの成長によって、人間が自然の支配からより自由になりえたか、人間による人間の支配をより少なくすることができたか、ということが産業の解決すべき真の課題でなければならない。

冒頭に述べたように、現代の人類はまだ飢餓の脅威からさえ逃げきっているわけではない。したがって、「くたばれGNP」というような発想は、苦勞知らずの二代目の思い上がりが含まれているように思われるが、他方、不要とも思われるものをつくっては使い捨てるといふ弊害をはらんだGNP至上主義も危険な惑溺であろう。

自然と人間の関係は複雑である。人間は自然の暴威から逃れたいと希求しているが、他面、人間は自然のふところから離れて生活できない。人間の自由な生活にとって自然の存在は必須の要

件である。しかし、人間は自然の支配から独立するために産業活動をしなければならず、大規模な産業活動は不可避免的に大量の自然を消費する。そしてこれは、母なる自然の荒廃を招く。

産業活動の水準が低いときは、人間はこのジレンマに気づかなかつたが、今やわれわれはこれを痛感せざるをえない。単にGNPが成長すればよいのではなくて、GNPと自然の間のバランスを考えなければならぬのである。GNPないし産業と社会の間のバランスについても、同様に行き届いた配慮が要請されている。

直線的なGNP拡大主義は、ゴミ戦争や地価暴騰に象徴される都市環境の破壊、富の分配の歪曲等々、数多の社会的摩擦や不正義をもたらすことは明白である。産業が無限定、無制御で成長をつづければ、それは自然と社会を破壊するガンとなるであろう。

人間の進歩の窮極的目標が人間の物質的ならびに精神的自由の獲得にあるとすれば、人間は自然に対しても人間に対しても屈従せず、他方、自然は人間に対して屈従しないというような世界が理想の世界であろう。このようなユートピアがすぐ実現できるという空想に陥ってはならないが、しかし、産業人は一度本源的理想にたちかえって、人間社会における産業の真の役割はなにか、その役割を果たすため産業はどのように制御されなければならないのか、を真剣に反省すべきときがきたように思われる。

産業界は栄光の頂点をこえた

戦後の日本社会の出発点を如実に示す記述としては、次のマーク・ゲインの文章にまさるもの